コラム

価値論に始まり、価値論に終わる

高田太久吉（金融・労働研究ネットワーク代表）

「茶碗に始まり、茶碗に終わる」陶芸の世界

釣りの世界には「フナに始まり、フナに終わる」という言葉がある。子供のころ、兄弟や友達と一緒に近所の池でフナ釣りを憶え、やがてフナ釣りに飽きて、川釣り、磯釣り、さらには船を出しての海釣りへと広がる。しかし、年老いて遠くに出かけるのが億劫になると、孫と一緒にまた近くの池でのんびりとフナ釣りを楽しむ心境になる。

同様に、陶芸の世界には「茶碗に始まり、茶碗に終わる」という言葉がある。ここで茶碗とは、御飯茶碗ではなく、抹茶を点てる茶碗である。プロの陶芸家だけではなく、およそ焼き物に手を染める人たちの多くは、自分なりに良い茶碗を焼き上げることを目指している。自分が焼いた茶碗でお茶を楽しむことは、至上の喜びなのである。

茶碗は、見たところ小さく、形も単純である。しかし、およそ焼き物の中で茶碗ほど難しいものはない。優れた茶碗には、茶器にふさわしい気品、造形的な美しさ、実際の使いやすさ、その他様々な条件が求められる。例えば、花活けなどでも優れた作品に求められる条件があるが、多少不出来でも、活ける花との相性、飾る場所の設えなどによって、花活けは活きてくる。茶碗については、こうした逃げ道はなく、茶碗自体が良くなければどうにもならない。

こんな焼き物としての潔癖さと難しさが、陶芸家の創作意欲を刺激し、理想の茶碗づくりに心血を注ぐことになる。因みに、プロの陶芸家の場合、自作の茶碗に付けられる値段が作家に対する社会的（市場的）評価の指標とみられている。そして、同じ作家の作品でも、茶碗には花器など他の作品に比べ一桁高い値段が付けられる。しかも、一度付けられた値段は、終生下げられることはない。作品に付けられた最高の値段がもはや市場で通用しなくなれば、陶芸家としての社会的生命が終わる。かくのごとく、陶芸の世界で茶碗は格別なのである。

経済学の全体系の出発点としての価値論

釣りや陶芸に限らず、どのような人間の営みも一本調子ではなく入口と出口があり、それらがどこかで循環して元に戻るという関係があるのではなかろうか。このことを、筆者の専門分野である経済学について言えば、「価値論に始まり、価値論に終わる」という言葉が思い浮かんでくる。

このうち、「価値論に始まる」の方は、経済学を少しでも勉強した人であれば納得しやすいであろう。周知のように、資本主義経済の運動法則を徹底的に考察し、その成果を壮大な学の体系として記述したマルクスの『資本論』は、その第一巻第一章を商品の社会的属性の分析から始め、いわゆる「労働価値説」を詳細に論証している。経済学の全体系の出発点はまさに価値論なのである。

経済学の体系が価値論から始まる理由は、簡単に言えば、資本主義経済のもっとも一般的な基礎が私的所有制度と社会的分業であり、これら二つの基礎上では、人間労働の所産――物的生産物に限らない――が一般に商品（市場での交換を目的とする生産物）の形態をとるからである。資本主義経済は、市場での商品交換を介して運動する経済システムであり、この商品交換を根本的に規律付ける法則が価値法則なのである。それゆえ、労働価値説を支持するか否かに関わらず、およそ価値論を持たない経済学の体系は成立し得ないのである。

これに対して、「価値論に終わる」の方は、経済学を勉強した人にも直ちには納得出来ないかもしれない。これもよく知られているように、マルクスは長年の労苦にも拘わらず『資本論』を完成することができず、第一巻以外は、原稿としても未完で、彼の死後に遺された膨大な草稿の束から、エンゲルスが苦心惨憺して出版可能な原稿に編集した。マルクス自身は『資本論』をどのような体系として完成することを目指していたのかを示唆する、いくつかのプランを書き残しており、それらには若干の異動があるが、大きな項目としては「資本一般」から始まり、「世界市場・恐慌」で締めくくられている。

言い換えれば、世界的システムとして歴史的に発展した資本主義の全体的な危機としての恐慌の解明をもって経済学の体系を総括することが想定されていた。そこで問題は、恐慌と価値論との関係如何ということになる。

現行『資本論』で恐慌に関わる記述が豊富に表れるのは、第三巻、とりわけその第五編・信用論の中である。そこで恐慌は、資本主義に固有の経済的矛盾が信用制度を介して増幅され、社会的再生産の維持・継続と両立しえない限度にまで累積した矛盾が、大規模な価値破壊という暴力的な形態で一時的に解消され、再生産過程が新たに起動するプロセスとして記述されている。

ところで、『資本論』は、資本主義的生産関係を、そのもっとも基礎的・一般的関係から、再生産過程の諸条件を経て、信用や貿易に媒介された複雑な全体（総過程）にまで体系的・発展的に論述している。この体系では、冒頭で説明された価値法則の作用は、論述が進むにつれて、発展した諸契機に媒介されて見えにくくなり、価値論と恐慌論との直接的な関連も不透明になる。このため、後学の研究者も、商品論から離れて信用や恐慌を論じる段階では、価値論との関連に直接言及することは比較的稀で、まして、現代資本主義の現実的諸問題を論じる場合に、それらの価値論的含意に触れられることは殆どないと言っても過言ではない。

かつてわが国では、価値論をめぐる論争が活発な時期があり、多くの研究成果が残されている。論争の中心は『資本論』での価値論の論証をめぐる見解の相違であり、続いて、投下労働説と支配労働説、さらには生産価格論での総価値と総価格の一致をめぐる論争、独占価格論と価値論の整合性をめぐる問題などが関心を集めた。しかし、筆者が知る限りでは、経済学における価値論の意義、資本主義の歴史的発展と価値法則の作用との関連などについては、大きな論争にならなかった。マルクスが体系的記述を残さなかった恐慌論を、マルクスの遺した記述を手掛かりして体系化する試みは盛んに行われたが、この場合にも恐慌と価値法則との関係について後学に裨益する議論は生み出されなかった。

先に述べたように、恐慌は大規模で暴力的な価値破壊であり、資本主義的再生産過程の危機的動揺である。価値法則が、資本主義の運動を規律付ける最も根本的な法則であるとすれば、大規模な価値破壊によって再生産過程を再起動させる「暴力」は、価値法則の作用と無関係に生じるはずはないであろう。むしろ、それこそ暴走する資本主義をいったん正気に引き戻すために、価値法則の厳しい鞭が振るわれた結果と見なければならない。恐慌は、価値法則が資本主義に与える容赦ない懲罰なのである。

社会的分業関係の最終の調整官としての価値法則

それでは、資本主義にかくも厳しい懲罰を与える価値法則の力はどこから来るのであろうか。

筆者は先に、資本主義のもっとも一般的基礎が私的所有制度と社会的分業であると指摘した。この二つの基礎上では、労働生産物は市場での交換を目的とする商品の形態をとり、この商品交換関係を根底で規律付けるのが価値法則であると述べた。

ところで、これら二つの基礎のうち、私的所有制度は人類史に永遠に付随する関係ではない。これはいずれ、その人間活動に対する制限的作用の故に文明発展の障害となり、完全に消滅しないまでも、新しい社会関係の中に「埋め込まれる」であろう。これに対して、発展した社会的分業関係は、文明の発展と不可分であり、新しい社会関係のもとで、さらに「文明的」な形態で発展を続けるであろう。

つまり、暴走する資本主義を正気に引き戻す価値法則の力の拠り所は、社会が文明的（人間的）であるための人間労働の社会的あり方と密接に関係しているのである。類的存在としての人間が従事する社会的労働こそが人類社会と文明の存続基盤であり、文明社会の人間労働は社会的労働（分業）として初めて社会的に有益な所産をもたらす。マルクスも述べたように、新しく発展した社会では、人々は私的・個人的目的に利用できる多くの「自由時間」を手にするであろうが、本来の労働は依然として社会的分業の一環としてなされるものである。

このように考えると、価値法則の作用が、資本主義に限られず、文明的な人類社会の存続・発展と深くかかわっていることが明らかになる。人間労働のあり方が、文明的社会の要請から大きく乖離する時、社会的分業関係の最終の調整官として、価値法則が懲罰の鞭を振るう。逆に、社会的分業関係が人間自身によって文明的に制御・調整できるようになれば、価値法則の出番はなくなり、資本主義の運動法則の学としての経済学の役割も終わる。回りくどい説明になったが、かくして経済学は、価値論に始まり、価値論に終わるのである。

以上の意味で、現代資本主義の急激な労働再編、産業再編、企業の統廃合、さらには激化する競争と利潤圧力のもとで、野蛮な資本の暴走に抗い、文明的な職場環境と人間にふさわしい、働き甲斐のある労働を求めて奮闘する労働組合の運動は、人間社会にふさわしい社会的分業関係の発展と結びついており、それ自体が価値法則の作用作用の一環をなしているのである。時に企業経営者に対する痛い「鞭」として作用する労働組合の画期的な運動成果は、文明社会存続を監察する価値法則の「見えざる」作用の可視化なのである。